

# ワード集中講座◆段落設定とルビ◆

ねこ  
猫の事務所

くわんが  
……ある小さな官衙に関する幻想……

宮沢賢治

軽便鉄道の停車場のちかくに、猫の第六事務所がありました。ここは主に、猫の歴史と地理をしらべるところでした。書記はみな、短い黒の縫子の服を着て、それに大へんみんなに尊敬されましたから、何かの都合で書記をやめるものがあると、そこらの若い猫は、どれもどれも、みんなそのあとへ入りたがつてばたばたしました。けれども、この事務所の書記の数はいつもただ四人ときまつてゐましたから、その沢山の中で一番字がうまく詩の読めるものが、一人やつとえらばれるだけでした。事務長は大きな黒猫で、少しもうろくしてはゐましたが、眼などは中に銅線が幾重も張つてあるかのやうに、じつに立派にできてゐました。(インデント：左3文字、右3文字、行間隔：固定値16ポイント)

さてその部下の

一番書記は白猫でした、

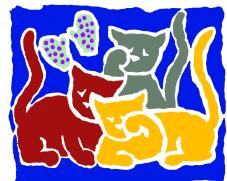
二番書記は虎猫でした、

三番書記は三毛猫でした、

四番書記は竈猫でした。(インデント：左10文字、行間隔：固定値24ポイント)

竈猫といふのは、これは生れ付きではありません。生れ付きは何猫でもいいのですが、夜かまどの中にはひつてねむる癖があるために、いつでもからだが煤すすできたなく、殊に鼻と耳にはまづくろにすみがついて、何だか猩たぬきのやうな猫のことを云ふのです。ですからかま猫はほかの猫には嫌はれます。

けれどもこの事務所では、何せ事務長が黒猫なもんですから、このかま猫も、あたり前ならいくら勉強ができても、とても書記なんかになれない筈はずのを、四十人の中からえらびだされたのです。大きな事務所のまん中に、事務長の黒猫が、まつ赤な羅紗をかけた卓て一ぶるを控へてどつかり腰かけ、その右側に一番の白猫と三番の三毛猫、左側に二番の虎猫と四番のかま猫が、めいめい小さなテーブルを前にして、きちんと椅子にかけてゐました。(行間隔：固定値18ポイント、クリップ：オンラインクリップ( Cat, Animal, Clipart, Colorful )



ところで猫に、地理だの歴史だの何になるかと云ひますと、まあこんな風です。  
事務所の扉をこつこつ叩くものがあります。「はひれつ。」事務長の黒猫が、ポケットに手を入れてふんぞりかへつてどなりました。四人の書記は下を向いていそがしさうに帳面をしらべてゐます。

ぜいたく猫がはひつて來ました。  
「何の用だ。」事務長が云ひます。  
「わしは氷河鼠ひょうがねずみを食ひにベーリング地方へ行きたいのだが、どこらがいちばんいいだらう。」「うん、一番書記、氷河鼠の産地を云へ。」一番書記は、青い表紙の大きな帳面をひらいて答へました。(行間隔：固定値16ポイント、2段組、行頭の「の位置調整)

一番書記は、青い表紙の大きな帳面をひらいて答へました。

「ウステラゴメナ、ノバスカイヤ、フサ河流域であります。」事務長はぜいたく猫に云ひました。

ページ設定（余白⇒上下左右の余白はすべて20ミリ、本文の文字はMS明朝10.5ポイント、英文字はArialを使用）